

地元有識者へのヒアリング

1 ヒアリング対象者

屋久島山岳部の適正利用の基本理念やビジョンを考えるにあたり、屋久島の人々の「伝統的な自然観」、「屋久島の人と自然との関わり」や、昭和40年代中ごろから約20年続いた「自然保護と開発をめぐる葛藤の時代に描いていた屋久島への思い」などを踏まえたものとするために、2回に分けて地元有識者にヒアリングを行った。1回目は、平成28年度第2回検討会の資料2-3-1として、鎌田氏、長井氏、大山にヒアリングした。その後、2回目として兵頭氏、柴氏へのヒアリングを行った内容を追加した資料とする。

表1 ヒアリング対象者リスト

	氏名	ヒアリング 実施日	所属	聴取項目
1回目 ヒアリング	鎌田 道隆 氏	平成29年 1月16日	奈良大学名誉教授	・屋久島の人々の自然観、人と自然の関係について
〃	長井 三郎 氏	平成29年 1月16日	民宿「晴耕雨読」経営	・屋久島の自然保護の歴史について
〃	大山 勇作 氏	平成29年 1月17日	屋久島科学委員会委員	・屋久島の人々の自然観、人と自然の関係について
2回目 ヒアリング	兵頭 昌明 氏	平成29年 2月20日	旧上屋久町議会議員	・屋久島の自然保護の歴史について
〃	柴 鐵生 氏	平成29年 2月20日	旧上屋久町議会議員	・屋久島の自然保護の歴史について

2 ヒアリング結果の概要

本業務のヒアリングで得られた情報の概要を示す。「歴史を示す史料や史実」、「屋久島の人々の自然観、人と自然との関わり」、「岳参りを含めた信仰心」、「集落の特性」、「山岳部（ヤクスギ）の利用」、「海域への経済的依存」、「自然保護活動当時の思い」、「これからの屋久島と観光」、「屋久島の問題提起とビジョン」、「島内、島外の子供たち」などについての情報が得られた。ヒアリングメモについては本節の4.3に示す。

表2 ヒアリングでの特記事項

項目	ヒアリング対象者	特記事項
歴史を示す史料や史実	鎌田 道隆 長井 三郎 大山 勇作	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの歴史から、屋久島にはあるとされている「原始的な精霊信仰」について史料や史実は残っていない。（鎌田 道隆） ・屋久島の古い資料は失われてしまったので、「楠川古文書」だけが、屋久島の直接証拠として残されているだけだと思う。（長井三郎）

		<ul style="list-style-type: none"> ・屋久島の人が自然に対する畏敬の念を持っていたことを裏付ける確実な根拠としての史料や史実は残されていない。理念を作る際には、過去にあったことを文章化するだけではないので、新たに文章にして位置づけていくことも次の発展につながると思われる。(大山勇作)
屋久島の人々の自然観、人と自然との関わり	鎌田 道隆	<ul style="list-style-type: none"> ・人間の営みは自然の営みの中に取り込まれており、人と自然は切り離されたものではなく一体化していたと考えられる。(鎌田 道隆) ・人の自然観は「山そのものを神様」としており、神はどこにでも存在し、「人の住む世界」と「神の住む世界」を区別していた。その境界が牛床詣所ではないか。(鎌田道隆)
岳参りを含めた信仰心	鎌田 道隆 長井 三郎 大山 勇作 柴 鐵生	<ul style="list-style-type: none"> ・山は恐ろしい存在であり神がいると信じ人間は一步下がってそれらを崇め奉っていたことが「精霊信仰」につながる要因だったと思われる。(鎌田道隆) ・集落と山は密接につながり、山は信仰の対象であると同時に、死んでから行く場所でもあった。(鎌田道隆) ・岳参りは山と集落が関係を持つ機会であったので、心の部分で山との付き合いはあった。(長井三郎) ・山への信仰心の象徴的なものとして、昔の人は朝起きたら顔を洗ってから山に向かって拝んでいたという精神的な面を持ち合わせていた。(大山勇作) ・現在では、山は生活の場ではなくなったので、心のよりどころだけになった。(大山勇作) ・仏教が屋久島に入って来た後は古来の山への信仰と仏教が共存体系をとっていたと思われる。(鎌田道隆) ・伝統は、その時代に生きていた人たちの感じ方だったと思う。それが岳参りになったのかもしれない。(柴鐵生)
集落の特性	鎌田 道隆 大山 勇作 兵頭 昌明	<ul style="list-style-type: none"> ・人々の生活や文化の基盤は集落だったが、集落間を結ぶ道がなく交流ができなかった。(鎌田道隆) ・屋久島に基幹道路が通る以前は、集落は独立国家のように成り立ち、集落間の交流や物資の移動は少なかった。(大山勇作) ・種子島には領主はいたが、屋久島にはいなかった。各集落にも首長はいなかった。屋久島は領主がいなくてもまとまっていたのは、島に財産がなかったためなのか。島民の協同作業は漁だけだった。(兵頭昌明) ・屋久島には縄文時代以降からの焼物(土器)があまりない。このことは、屋久島近海を航海していく上で、屋久島は高い山がありそれが目印となって来島しやすく、水も豊富だったため、水の補給や船の保守をした際に、諸外国や周辺島しょからの物資が屋久島に入ってきたことによる。(兵頭昌明)
山岳部(ヤクスギ)の利用	鎌田 道隆 大山 勇作 兵頭 昌明 柴 鐵生	<ul style="list-style-type: none"> ・島津藩は山の財産が減少しないよう、山と海での作業量を命令していた。(大山勇作) ・集落から海岸までヤクスギは林立していたのではない。集落から近い場所から伐って、切株は焚き木などに用いていたため、集落や海岸周辺にはヤクスギが生育していた痕跡がない。(鎌田道隆)

		<ul style="list-style-type: none"> ・ヤクスギは屋根を葺く「平木」のほかに、建材に使える「板木」や「船の帆柱」にも利用していた。(鎌田道隆) ・ヤクスギは船の帆柱にも利用されており、屋久島以南に位置する島々ではスギの自生がなかったため、屋久島が帆柱、大型船製造に使用される材の供給地となっていた。(大山勇作) ・島内には屋久島産材を使用した木造構造物はない。(兵頭昌明) ・山と住民の関係はこれまで3回途切れている。①薩摩藩の山にしたこと、②地租改正(山林の国有化)、③国立公園の特別保護地区指定により、山と切り離された。住民は意識していないが、国の都合で住民は山では何もできなくなる。(兵頭昌明) ・山岳部利用のあり方についてはこれまで本気で議論しておらず、これまでアクションは起こしていない。(兵頭昌明) ・国立公園、世界自然遺産というゾーニングを受け入れたことで、山に対して関心がなくなったが、今がターニングポイントではないかと思う。(柴鐵生)
海域への経済的依存	鎌田 道隆 長井 三郎	<ul style="list-style-type: none"> ・暮らしの主たる部分は海に依存しており、海が中心の生活だった。山に入って働くためには林業の技術が必要となるため、漁業の方が手取り早く儲かった。(鎌田道隆) ・薩摩藩統治下時代では、ヤクスギ伐採、トビウオ漁、鰹節作りを強化しており、農業に対して振興策をとっていなかった。大半が山岳の屋久島では安定供給できない稲作よりも、海での採集のほうが豊富だった。(長井三郎)
自然保護活動当時の思い	長井 三郎 大山 勇作 兵頭 昌明 柴 鐵生	<ul style="list-style-type: none"> ・自然保護活動で守った自然は自分達の世代では活用しなくてもいい次の世代に任せようという考え方を持っていたが、違う考え方の人もいた。(長井三郎) ・世界自然遺産登録では、小杉谷地区のように伐採してしまった箇所は遺産地域から外しているが、屋久島の負の遺産として取り込むべきだったと考える。(長井三郎) ・屋久島が遺産登録になれば伐採に歯止めがかかるという思いがあった。そして、屋久島が日本で最初に遺産登録される事は「日本で一番大切な自然」であることを伝えたかった。(大山勇作) ・屋久島の人々の暮らしを含めて「屋久島を守る会」を作った。昭和40年代から宮之浦川上流などの伐採反対運動に限らず、屋久島全体を守る体制を作った。(兵頭昌明) ・自然保護運動ではなく、植民地からの脱却、島外からの搾取から自治権を取戻したかった。(兵頭昌明) ・「屋久島を守る会」は屋久島の本質を守る事を目的としていた。屋久島にとって大切なことは、国にとっても大切であるという思いから保護活動をしていた。(柴鐵生) ・保護活動の結果として世界遺産登録に結びついた。世界遺産へ登録は屋久島からの提案ではない、国の提案であり考え方である。世界自然遺産になるプロセスにおいて、島民の議論がなかったため遺産登録後、屋久島から

		<p>は島民の意識が離れていったと思われる。(柴鐵生)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「屋久島を守る会」に力を貸してくれていた恵命我神散創始者の柴昌範氏の言った「森は人を創る」という言葉は常に意識の中にあり続けた。これが屋久島に対する思想だと思うが、屋久島の人からは、このような思想は薄れてきている。(柴鐵生)
<p>これからの屋久島と観光</p>	<p>鎌田 道隆 長井 三郎 大山 勇作 兵頭 昌明 柴 鐵生</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これからの観光のあり方のひとつとして、「人を通じて自然を語る」形態もとり入れることで、山を見るだけではなく、里の文化とつながり、自然だけでなく屋久島の人も観光資源になれるよう、島の魅力を世界に発信してほしい。(鎌田道隆) ・島民が失っている「山への畏敬の念」を取り戻して、屋久島のこれからはこうあるべきだと理念を示す事が重要である。(鎌田道隆) ・自然保護の活動をしていた当時は、ガイドという職業がここまで大きくなるとは思っていなかった。屋久島の自然で生業を立てているのだから、自然に負担を掛けないやり方を取り入れてほしい。(長井三郎) ・観光を縄文杉だけに頼るのではなく、観光に学びを付加させて、「学ぶ喜び」を感じてもらうことで、観光資源を安定させたい。(大山勇作) ・現状では、縄文ルートを含めて、どのような利用体験を提供したいのか決められないので人数制限もできない。(大山勇作) ・「超自然スーパーネーチャー屋久島」で「森・水・人」とのふれあいを出し、「屋久島文化村構想」では「自然と人との共生」を掲げているが、次にどのような事業展開をしていくのか出ていない。屋久島憲章は屋久島の原則を示したが、これからの方向性を見据えたものがないので、それを出してもらいたい。(大山勇作) ・島の人々が豊かにくらせるようになる事が目的であり、その手段として観光がある。そして観光とは光を見せることだと思う。(兵頭昌明) ・遺産登録後は、住民の雰囲気が変わった。今、稼がないと現金が得られないから、稼ぐという考え方になっている。(兵頭昌明) ・種子島と屋久島を一緒にして、この間のアクセスを良くする事で圏域全体が活性化するという。今が屋久島観光のターニングポイントだと思う。(兵頭昌明) ・これまでの整備によって来島者数 40 万人の体制になっている。これをなんとかしないといけないという思いで屋久島町観光基本計画ができてしまっている。年間通して、入島者数の変動がなければ問題は少ないが、ピーク時に対応しようとしている事が問題である。管理するためには入域制限をするべきである。(兵頭昌明) ・区長がいくつもの役職や役割を兼任することが多いが、役職や役割を複数で分担して人材活用しないと、集落は活性化しない。1人に権力を集中させずに、分散させる。屋久島町民は 1/12,000 の役割がある事を認識してほし

		い。(兵頭昌明) ・屋久島は誰かの為、子供の為ではなく、人類にとって豊かな島としてあり続けてほしい。「森が人を創る」事が根底にあり、子供だけでなく全ての人に対して教育の島であると思う。(柴鐵生)
屋久島の問題提起とビジョン	柴 鐵生	・屋久島についての問題提起は語りつくされている。具体策がとれていなく、その原因や責任の所在が明確にされていないため、責任の所在を明らかにする必要がある。これにより様々な問題を解決する策が出てくるのではないか。(柴鐵生) ・「島をどうしていくのか」の議論を若い人たちにしてもらいたい。自分達はこのことについて責任をはたしていないので、責任をはたしてほしい。(柴鐵生)
島内、島外の子供たち	兵頭 昌明 柴 鐵生	・島の子供たちは、島外に出てから、外と屋久島を比較してこそ、屋久島の良さがわかるはずである。(兵頭昌明) ・修学旅行で来島した子供たちにも「島で見たものうち、自分たちのふるさとに何があるのかを見るように」と言っている。屋久島と自分達のふるさとを比較する出発点が修学旅行であってほしい。修学旅行生のふるさとも自然はあると思うが、それが集約したものが世界自然遺産の屋久島である。(兵頭昌明) ・観光を進めている一方で過疎化、高齢化という現象は起きている。様々な事が継承しにくくなっている。(兵頭昌明) ・島内の学校が統廃合して教育の場が縮小していく事は、屋久島にとってマイナスである。(柴鐵生)

3 ヒアリングメモ

日 時：平成 29 年 1 月 16 日（月）15:00～18:30

対象者：奈良大学名誉教授 鎌田道隆

実施者：九州地方環境事務所屋久島自然保護官事務所 田中準 首席自然保護官

日本森林技術協会 高橋雅美

■ 屋久島の人の自然観、人と自然との関わり

- ・屋久島は歴史的に見ても文化よりも自然の方が際立っている。そのため、人間も自然の一部として、人と自然とが共生している。
- ・人の自然観は「山そのものを神様」としており、神様はどこにでも存在するものと信じている。神様のいる場所を荒らさず、いつも山の神に接しながら生きてきた。
- ・「人の住む世界」と「神の住む世界」は区別しており、両者の境界には「牛床詣所」を作って、神と人の住む世界を棲み分けていた。
- ・古来からの自然観とは人間は自然に取り込まれており、人と自然は一体化していると考えられていた。

■ 屋久島が山岳信仰に至った経緯と信仰心

- ・これまでの歴史から、人間は強くなく自然の脅威の中で、自然に抱かれながら生きて行くという「原始的な精霊信仰」をもっていたと思われるが、史料や史実としては残っていない。
- ・里から前岳、奥岳に入ると、大きな木や岩が現れて危険な場所になってくる。山は恐ろしい存在であり、そのような場所には神がいるため人間は一步下がってそれらを崇め奉る存在だったことが「精霊信仰」につながる要因だったと思われる。
- ・近年の岳参りは「祠」を拝みに行っているが、もともとは山全体を神としてあがめていた。山に祠を祭らないと信仰心が欠けるように思われることを嫌って、祠を設置したといういきさつがある。
- ・集落ごとに岳参りする山は異なる。集落ごとの山へ岳参りすることは「集落の祈願」をするためであった。
- ・精神面でも集落と山は密接につながっており、死んだ人は山に登って神様になり、山の上から集落を見守り、時には集落へ降りてくると信じていた。このように、山は信仰の対象であると同時に、死んでから行く場所でもあった。
- ・旧暦 3 月 3 日は、潮が引いた時に、山の神様は海辺の潮に足をつけて元気になって山に戻っていく。人も神も一緒に遊ぶ日としていた。
- ・屋久島の山岳信仰は仏教よりも古く、仏教が屋久島に入ってきた後は相互理解をしていたと思われる。このため、集落の年中行事は神仏融合になっている。

■ 集落の特性

- ・自然発生的にできた集落は 100 戸程度と小さく、海岸沿いだけに集落が存在した。
- ・人々の生活や文化の基盤は集落だったが、集落間を結ぶ道がなく交流ができなかった。昭和に入ってから隣村までは遠く、自由に行き来が出来なかった。

■ ヤクスギの利用

- ・集落周辺にもヤクスギはあったが、伐りつくした後は奥岳のヤクスギを伐るようになったのだろう。
- ・集落から海岸までヤクスギは林立しており、樹齢数百年程度だった。集落から近い場所から伐っていき、切株も焚き木などに用いていたため、集落や海岸周辺にヤクスギが生育していた痕跡がないのだろう。
- ・「ヤクスギ」は島の言葉として出てこない。江戸時代後期にヤクシマスギとしての「ヤクスギ」が出てくる。室町時代の日本語をポルトガル語に訳す辞書に「ヤクイタ」が出てくるが、屋根を葺くために使用されヤクスギで作った「ヤクイタ」は 50 年～70 年の耐久があった。
- ・ヤクスギは屋根を葺く「平木」のほかに、建材に使える「板木」や船の帆柱にも利用していた。これらは山の奥の木を利用しており、その手前の木は炭焼きに利用していた。

■ 屋久島の農業、漁業

- ・昭和 13 年、14 年頃は農地開拓され田が増えたが、昭和 40 年頃から稲作はなくなってきた。稲作は屋久島の一部の集落では行われていたが、稲作以前または殆どの集落では焼畑で転作しながら作物を作っていた。以前は集落回り 1 里半にわたって「シカ垣」を作り、その中で焼畑をしていた集落もあった。

江戸時代以前は麦、自然薯、ガジュツ等を作っていた。カライモが入ってきたのはもっと後。

- ・暮らしの主たる部分は海に依存しており、海が中心の生活だった。山に入って働くためには林業の技術が必要となるため、漁業の方が手っ取り早く儲かった。
- ・林業技術や道具がどこから来たのか、記録している文献が残っていない。
- ・楠川、栗生では仔馬のような「アシカ」が集落に入ってきて馬の餌を食べていたといわれている。「昔は海にアシカが生息できるほど豊かだった。また、島周辺にはサンゴや海藻が多く、多くの魚が産卵にきていた。当時の海が豊かであることは、山が豊かだったことになる。
- ・山、里、海のサイクルに人間の営みが組み込まれていた頃の暮らしについては、語りで現在に伝えられている。
- ・山での猟は、シカ、サルが対象だった。

■ これからの観光のあり方

- ・屋久島は自然観光一辺倒だった。観光とはすぐれたものを見るということ。レクリエーションや癒やしもいいが、それだけでいいのか。人間が作ってきた文化を見る観光も取り入れて、何をそこから学ぶのか考える事ができる。
- ・ガイドをはじめとする住民が島の魅力を語る事によって、自然と人間がどうかかわっているのか幅広く知る事ができる。
- ・これからの観光のあり方のひとつとして、「人を通じて自然を語る」形態もとり入れることで、山を見るだけではなく、里の文化とつながり、その価値観を伝えていくことにつながる。自然だけでなく、屋久島の人も観光資源になれるよう、生き方に誇りを持ち、島の魅力を世界に発信してほしい。
- ・島民が失っている「山への畏敬の念」を取り戻して、屋久島のこれからはこうあるべきだと理念を示す事が重要である。

日 時：平成 29 年 1 月 16 日（月）19:00～21:30

対象者：長井三郎

実施者：九州地方環境事務所屋久島自然保護官事務所 田中準 首席自然保護官

日本森林技術協会 高橋雅美

■ 自然保護で活動していた当時の思い

- ・昭和 54 年の土面川流域および永田川河口域の山くずれ、土石流災害までは、山は遠いものだったが、これが引き金となって自然保護活動につながった。永田集落の人工林は人の手が行き届いていた林だったので、災害が発生するとは思ってもいなかった。そこで災害が起きてしまったことが大きい。
- ・屋久島には、縄文杉のロープウェイ、宮之浦のゴルフ場、一湊のヨットハーバー、水の輸出など事業計画がいくつもあったが、「屋久島を守る会」ではこれらの計画に反対して屋久島の資源を守り抜いた。そして、守った自然は自分達の世代では使わなくてもいいという考え方を持っていたが、違う考え方の人もいた。

・上屋久町は屋久町よりも伐採が先行していたので、伐採への危機感があった。屋久島でも、北と南で気候にも、感情にも温度差があった。

・世界自然遺産登録では、小杉谷地区のように伐採してしまった箇所は遺産地域から外しているが、屋久島の負の遺産として取り込むべきだったと考える。国立公園の区分については、白谷の450haは特別保護地域に値すると考えていたが、第3種特別保護地域に指定したことから、今後も公園区域は見直していくべきである。「屋久島を守る会」では指定された保護地域の他にゾーニングをしたいという思いがあったが、実際には区分けしていない。

・保護運動では、基本的に現場を見に行く事をしてきた。町民にも現場を見てもらうために、セスナをチャーターして上空から山を見た時もあった。

・「屋久島を守る会」の中でも、思想は統一していなく、保護へのアプローチもそれぞれであり、自然や人が多様な共存関係にあった。唯一、季刊誌「生命の島」が共通項であり、これが果たした役割は大きかった。

■ 島民にとっての山岳部を含めた屋久島とは

・屋久島の古い資料は失われてしまったので、「楠川古文書」だけが、屋久島の直接証拠として残されているだけだと思う。

・島民の多くは、日々の暮らしと山との関係が希薄で、山がどのように使われているのか知る機会は少ない。昔は平木とりのために屋久杉が伐採され、今では観光で利用されているが、観光でどういう風に山が利用されているのかを自分の目で見て知ってる島民は少ない。

昔から岳参りは山と集落が関係を持つ機会であったので、心の部分での山との付き合いはあった。

・登山道整備により、木道や階段が設置されて本来の自然から離れてしまっているが、本来は登山道へは踏圧を軽減させるように人数制限をするべきである。

・屋久島に残されている資源には島民は気が付かないが、山・川・海と屋久島の子供たちが一番の資源だと思っている。現在は「山ん学校」開催で屋久島の自然を子供たちに伝えている。

■ 屋久島の基幹産業となった観光について

・自然保護の活動をしていた当時は、ガイドという職業がここまで大きくなるとは思っていなかった。山岳部で問題となっているし尿については、山へお客を連れていくガイドが排泄物を管理するべきだと思う。ガイドがお客に排泄物は持ち帰ることを説明すべきである。屋久島の自然で生業を立てているのだから、自然に負担を掛けないやり方を取り入れてほしい。そして、外からきているガイドはよく勉強して知識を習得しているので、これからも集落というコミュニティーにどうかかわってくれるのか期待したい。

・遺産地域にふさわしい河川や川を残し、本来の自然の輝きを子供たちに伝えていきたい。また、里には文化的歴史もあるので、観光客だけでなく島民にも知ってほしい。

■ 生活基盤としての海と山の利用について

・薩摩藩統治下時代では、ヤクスギ伐採、トビウオ漁、鰹節作りを強化しており、農業に対して振興策をとっていなかった。大半が山岳の屋久島では安定供給できない稲作よりも、海での採集のほうが豊富

だった。現在でも月に 2 回は大潮があるので夜間に磯の物を採集しており、山よりも海の方が日常的に関わりの度合いが強い。

・戦後は水資源を活用しての重化学工業の島に移行する過程で、屋久島電工ができたが、それで終わってしまった。

日 時：平成 29 年 1 月 17 日（火）10:00～12:00

対象者：科学委員会委員 大山勇作

実施者：九州地方環境事務所屋久島自然保護官事務所 田中準 首席自然保護官

日本森林技術協会 高橋雅美

■ これまでの歴史を示す、史料や史実

・屋久島の人が自然に対する畏敬の念を持っていたことを裏付ける確実な根拠としての史料や史実は残されていない。理念を作る際には、過去にあったことを文章化するだけではないので、新たに文章にして位置づけていくことも次の発展につながると思われる。

・シドッチや鑑真が屋久島に上陸していくらかの影響をもたらしたとあるが、史実が残されていない部分もある。

・日本から諸外国に行くルートとしては、種子島、屋久島を通してその南をたどったとされている。そのため船の事故は多かった。

■ 岳参り、信仰心について

・岳参りがどの時代から始まったのか文献がないためわからないが、戦後からは把握している。益救神社がどこに位置しているのかも把握されていなかった事から、あまり深い信仰心がなかったのではないとも思われる。戦時中の岳参りでは、戦地から無事に戻れることを願って山で祈った。

・山に対しての信仰心の象徴的なものとして、昔の人は朝起きたら顔を洗ってから山に向かって拝んでいたという精神的な面を持ち合わせていた。人は死ぬと山の高い所から西に帰っていくと信じられていることから、西を向いて拝む事につながっていると思われる。

・中学 2 年生で初めて岳参りに参加して永田岳に登り、鹿之沢小屋に泊まっていた。夜間は寒いのでシャクナゲ等の周辺の樹木を伐って燃やし、帰りにはシャクナゲの枝を束にして集落へ持って帰ったため、現在でも永田岳のシャクナゲは宮之浦岳よりも少ないと思われる。

・現在では、山は生活の場ではなくなったので、心のよりどころだけになった。

・山岳信仰だった屋久島に日蓮宗が入って、共存体系をとったのだろう。

■ ヤクスギの利用について

・ヤクスギは船の帆柱にも利用されており、屋久島以南に位置する島々ではスギの自生がなかったため、屋久島が帆柱、大型船製造に使用される材の供給地となっていた。

・樽づくりにもヤクスギを利用していたためスギ不足となり、島津藩が山からスギの苗を持ってきて植

えていた。ヤクスギは江戸時代から生活を支えていた。

- ・ヤクスギは集落近くから伐採されていたため、その近辺では植林されていたが、その他では天然更新が早かったため植林はしていなかった。

- ・国有林野は時代の要請に応じて伐採もしてきたが、自然がよく残っている場所も国有林であることも事実で、国有林が遺産地域になっている。林野庁の功績もあるとおもう

■ 藩政時代からの生活基盤について

- ・屋久島の島津藩は島民の家系図を焼き払った。島民の生活は、白米を食べる程度の豊かさがあり、食料に困窮する事はなかったため、島民の島津藩への恨みなどはあまりなかったとされている。島津藩は山の財産が減少しないよう、山と海での作業量を命令していた。

- ・現在では、農業が基幹産業となることは現実的に困難であるが、地産地消程度が適していると思われる。

- ・屋久島に基幹道路が通る以前は、集落は独立国家のように成り立ち、集落間の交流や物資の移動は少なかった。屋久島憲法でうたわれている「国有林は地元住民の利益となるべき取扱をする」等が影響して沿岸林道（現・県道）が開通した。

- ・人々の生活は海と密接に関係があった。海岸沿いに家々が密集した集落は漁業集落だった。屋久島では山菜食がなく、また、植物の名前が付いていない、方言がないということがあり、日常生活面での山との関わりの少なさを現しているのではないか。

■ 屋久島の環境保護運動について

- ・昭和 47 年に「屋久島を守る会」が発足した当時は、屋久島が遺産登録になれば伐採に歯止めがかかるという思いがあった。そして、屋久島が日本で最初に遺産登録される事は「日本で一番大切な自然」であることを伝えたかった。

- ・屋久島原生林伐採、石油備蓄基地誘致、ロープウェイ構想等に反対してきた保護活動期以降は、屋久島住民が自然保護との関わりが希薄になったが、屋久島はいくつもの保護地域が重なっており、他とは違う豊かさの原点があり重要であることを伝えていきたい。

■ 観光地化した屋久島と、これからの屋久島について

- ・屋久島は観光が基幹産業として大きく育ったが、縄文杉だけに支えられた観光は転換期にきている。そのため、縄文杉は 100 人／日に限定して、登山道手前では研修を受ける、ガイド付きとする、料金を徴収する等の条件設定が必要と思われる。現状では、縄文ルートを含めて、どのような利用体験を提供したいのか決められないので、人数制限もできない。どの離島でも同じだが、細く長く島の自然を利用して他に頼るものがない。ある程度は経済的に豊かにならないと、屋久島にとってより良いことが考えられないと思われる。

- ・観光を縄文杉だけに頼るのではなく、観光に学びを付加させて、「学ぶ喜び」を感じてもらうことで、観光資源を安定させたい。この「学ぶ喜び」を伝えることができるガイドには大きな役割があると思う。そして、島民自身が「屋久島は世界の宝」であることを誇りとし、「地球に残された自然」を大切にすることを必要とする心を持つことが必要である。また、屋久島は海、山、照葉樹林の多様な文化をつなげて伝えることがで

きる島でもある。

・これまで屋久島では、「超自然スーパーネチャー屋久島」で「森・水・人」とのふれあいを出し、「屋久島文化村構想」では「自然と人との共生」を掲げているが、次にどのような事業展開をしていくのか出ていない。屋久島憲章は屋久島の原則を示したが、これからの方向性を見据えたものがないので、それを出してもらいたいが、住民の関心が低い事や、町行政や関係機関での考え方が違うのでまとまらず足並みがそろわない状況にある。

日 時：平成 29 年 2 月 20 日（月）14:00～17:30

対象者：旧上屋久町議会議員 兵頭昌明

実施者：九州地方環境事務所屋久島自然保護官事務所 田中準 首席自然保護官

日本森林技術協会 高橋雅美

■ 自然保護活動をしていた当時の思い

- ・昭和 40 年代から宮之浦川上流などの伐採反対運動に限らず、屋久島全体を守る体制を作った。
- ・1960 年代は自然保護の活動が芽生えてきた時代だった。明治大学の学園祭では屋久島の伐採問題について展示していた。その展示には「屋久島からすべての住民をどこかへ移住させなければ、この自然は守れない」と提言していたが、これを否定することにエネルギーを注いだ。
- ・屋久島の人々の暮らしを含めて「屋久島の自然を守る会」ではなく、「屋久島を守る会」を作った。会員は島内住民全員という事にして会員名簿は作成しなかった。メディアには 40 名と伝えていた。
- ・違うと思ったことは間髪入れずに、責任を持って意見を行った。そのため他とは違ったかたちで動く事ができた。
- ・当時の屋久島は林野庁のドル箱だった。国有林の生産力増強計画により、「天然林」はほとんど成長の見込めない「老齢過熟林」と決めつけて皆伐してスギやヒノキの若い林にしようという乱暴な国策により山の全部を搾取しようとしていたが、自分達は次の世代に山を利用する選択肢を沢山残しておきたかった。そんな時に、京都大学の学生だった山極寿一氏（第 26 代京都大学総長）が協力してくれた。
- ・林野庁が最後のドル箱として白谷雲水峽を残しておいたため、結果的に第 3 種特別保護地域となった
- ・自然保護運動ではなく、植民地からの脱却、島外からの搾取から自治権を取戻したかった。このために民意を問うてきた。これをきちんとやらないと屋久島は植民地経済から脱却する事はできない。
- ・瀬切川伐採反対運動が終わったところで、活動はひと区切りついた。いかにマイナス（搾取される）部分を少なくするかという活動だった。
- ・林野庁の施業計画に「垂直分布」という言葉が作られて、保護運動のスローガンも「垂直分布（点ではなく線として）」として保護する事とした。このことが西部地域の瀬切川流域原生林の保護につながった。

■ 縄文時代からの屋久島

- ・種子島には領主はいたが、屋久島にはいなかった。各集落にも首長はいなかった。屋久島は領主がいなくてもまとまっていたのは、島に財産がなかったためなのか。島民の協同作業は漁だけだった。

- ・屋久島には縄文時代以降からの焼物（土器）があまりない。このことは、屋久島近海を航海していく上で、屋久島は高い山がありそれが目印となって来島しやすく、水も豊富だったため、水の補給や船の保守をした際に、諸外国や周辺島しょからの物資が屋久島に入ってきたことによる。
- ・一湊は江戸時代から苗字が付いているが、一湊港に船の入込が多かったためとも言われている。そのため、歴史、自然環境の面で特異な島であった
- ・生のカツオを周辺島しょに運ぶまでに腐ってしまうため、鰹節にしていた
- ・広葉樹は伐採後 20 年程度経過すると復元するので植林する手間がかからない。この手法は島津藩になってからやり始めた。

■ 山との関わり

- ・山と住民はこれまで 3 回途切れている。①薩摩藩の山にしたこと、②地租改正（山林の国有化）、③国立公園の特別保護地区指定により、山と切り離されたと考えられる。住民は意識していないが、国の都合で住民は山では何もできなくなる。
- ・山とは節度を持って関わるべき。昔から多様な関わり方があった。現在の現金経済の理論に従っていたら屋久島の資源がなくなってしまう。
- ・国有山林下戻請求の却下から後 3 年で 100 年が経過する。この 100 年経過に合わせて、住民側に意識をとり戻してもらいたい。

■ 山岳部利用

- ・山岳部利用のあり方についてはこれまで本気で議論はしたことはない。
- ・白谷雲水峡への道路拡幅工事をしているが、駐車場が狭く滞在時間は伸びない。現在は入島者数が減ってきているから、アクセスと利便性の良いものにしようとしているが、節度を持つことが必要。
- ・花之江河での木道設置や、縄文杉での「生命の砂、一握り運動」はやるべきではなかった。花之江河は自分が高校生だった頃とは状況が違っている。年配者には、過去と比較できる記憶があり、これを活用するべきである。
- ・寄付されたトイレは、その後の管理費等までは寄付した側で負担しないため、島にとってはいい事ばかりではない。
- ・登山客のし尿は、自分自身で持ち帰るべきである
- ・過疎、過密という言葉があったが、山へのかかわりが盛んになってから過疎が進行した。

■ 屋久島の観光

- ・島の人々が豊かにくらせるようになる事が目的であり、その手段として観光がある。そして観光とは光を見せることだと思う。
- ・遺産登録後は、住民の雰囲気が変わった。今、稼がないと現金が得られないから、稼ぐという考え方がなっている。
- ・他地域も含めて薄利多売になっているが、屋久島は違う方向を見出さなければいけない。
- ・屋久島町観光基本計画が策定されたが、「そうではないのでは」という事は多い。来島者数を増やす計画は、アクセスに利用する飛行機や船のような島外資本が潤う事になる。そして、島外からの金を稼ぐ

ことは、島にとっては役にたつことになるのか。島の人間の役に立てるようにするなら、滞在人口や民宿の稼働率を上げる事が必要である。ローカルなスタンダードを大切にすべきである。

- ・来島者が増加しても島外からのアクセスに関わる業者、ガイド、土産物屋が儲かるだけになる。
- ・屋久島空港滑走路延長は、計画から就航まで約 10 年程度要するため、種子島空港を利用すればいいと思う。種子島と屋久島を一緒にして、この間のアクセスを良くする事で圏域全体が活性化すると思う。不便でも行きたい所には行きたいはずである。今が屋久島観光のターニングポイントだと思う。
- ・屋久島では、これまでの整備によって来島者数 40 万人の体制になっている。これをなんとかしないといけないという思いで屋久島町観光基本計画ができてしまっている。年間通して、入島者数の変動がなければ問題は少ないが、ピーク時に対応しようとしている事が問題である。世界自然遺産屋久島山岳部環境保全協力金によって管理しようとしている部分があるが方向が間違っている。管理するためには入域制限をするべきである。

■ 里のエコツアー

- ・「里のエコツアー」は住民の生活域を利用している事を認識してほしい。平内の海中温泉見学もツアー内に入っているが露出度が高すぎると思われる。以前から「縁側観光」を提唱してきた。縁側は家の中の人と外の人との交流の場所である。観光も中まで全部見せずに縁側観光程度でいいのではないか。それ以上の露出は必要ではない。
- ・地元にはしかない食材や加工品も魅力がある。
- ・屋久島では文化を掘り起こしているが、文化等への着目は手薄だった。
- ・集落ごとに歴史の話をするのも興味深い。

■ これからの屋久島に必要な事

- ・本質の議論をしてこなかったが、目的をきちんと設定して、本質の議論をするべきである。それをやらないために、その時々世論や時代に流されてしまう。
- ・島社会は閉鎖的ではあるが、文化的には人の往来があるため解放的である。このような事もきちんと継承していく。
- ・10 の役職があれば、10 人に割り振って人材活用しないと、集落は活性化しない。1 人に権力を集中させずに、分散させる。屋久島町民は 1/12,000 の役割がある事を認識してほしい

■ 島内、島外の子供たちについて

- ・以前の屋久島はこれほどまでに有名ではなかった。今は屋久島高校出身であれば重みがある。子供たちが屋久島出身である事を誇りに思える時代が来ている。
- ・屋久島高校の環境コースを設定するときには、何をやるのか考えるべきだった。政治家のパフォーマンスにつかわれないようにする事が重要。高校と大学がつながっていないことが課題である。
- ・島の子供たちは、島外に出てから、外と屋久島を比較してこそ、屋久島の良さがわかるはずである。
- ・修学旅行で来島した子供たちにも「島で見たもののうち、自分たちのふるさとに何があるのかを見るように」と言っている。屋久島と自分達のふるさとを比較する出発点が修学旅行であってほしい。修学旅行生のふるさとにも自然はあると思うが、それが集約したものが世界自然遺産の屋久島である。

- ・島内施設は、一貫性がない。島外施設と似通っており、もう少しやりようがあるのではないか
- ・一湊では中学校が統合されたため、現在は小学校（34名）だけになった。高齢化率45%である。観光を進めている一方で過疎化、高齢化という現象は起きている。様々な事が継承しにくくなっている。

■ 屋久島産材の活用

- ・現在は屋久島庁舎建設に屋久島産材を利用してほしいということで、町と調整をしている。理想は100%屋久島の材を使用してほしいが、鹿児島本島にあるメーカーで材を加工して、庁舎建設する方針である。
- ・屋久島には木はあるが、製材所が1箇所しかないのも、その後は何もできないと言われた。しかし、島には製材機は4台あり活用できる。
- ・補助金を利用する際には、含水率を下げる事が条件となっている。屋久島には乾燥機がないため、補助金を使って屋久島産材で構造物を造ることができない。現在、島内には屋久島産材を使用した木造構造物はない。

■ 島内に生息する動物

- ・10年前から、タヌキは確認されていた。当時はめずらしかったが、現在ではめずらしくなくなった。ウサギは繁殖しなかった。
- ・コイタチはタヌキと共存している可能性がある。昔は家で飼育しているニワトリはイタチに捕食されていた。当時はイタチ捕獲専門の猟師がいた。シカ皮より、イタチ皮の方が高価だった
- ・シカの個体数調整をしているが、それは適切なことなのか。

日 時：平成29年2月20日（月）17:50～22:30

対象者：旧上屋久町議会議員 柴鐵生

実施者：九州地方環境事務所屋久島自然保護官事務所 田中準 首席自然保護官

日本森林技術協会 高橋雅美

■ 保護活動と世界自然遺産登録

- ・保護活動をしていた当時、「屋久島を守る会」からは世界自然遺産に登録してほしいとは言っていない。保護活動（瀬切川伐採反対運動では5年の間議論した）の結果として世界遺産登録に結びついた。世界遺産への登録は屋久島からの提案ではない、国の提案であり考え方である。世界自然遺産になるプロセスにおいては、島民の議論がなかったため遺産登録後、屋久島からは島民の意識が離れていったと思われる。
- ・「屋久島を守る会」に力を貸してくれていた恵命我神散創始者の柴昌範氏の言った「森は人を創る」という言葉は常に意識の中にあり続けた。これが屋久島に対する思想だと思うが、屋久島の人からは、このような思想は薄れてきている。
- ・屋久島の自然保護に関する問題点を克服する際には、地元との合意形成が必要だった。

■ 自然保護活動をしていた当時の思い

・「屋久島を守る会」は屋久島の本質を守る事を目的としていた。屋久島にとって大切なことは、国にとっても大切であるという思いから保護活動をしていた。自分達の思いを取り上げてくれた屋久島はすごいと思った。

・当時は木材供給をする事が正しいとされていたが、今となってはそれが正しくなかったことになる。

・屋久島は牽引する力があり、それを期待されているのに、やらないままできてしまった。

・屋久島の人たちは「こうあるべきだ」と言えるから、島の人たちに任せればよいと思っていた。地方の事は地方に任せてもらいたい。

・東京で同じ思想をもった人が集まって保護活動を始めたことから、屋久島は一つになれると思う。保護活動をしていた当時の人たちの気持ちを伝えていきたい。

・数十年もの間に、いろいろ踊らされたが、原点に立ち返りたい。今ここに戻そうとする芽が若い人たちに生まれてきている。それを大切にしていけば、本質にたどり着くのではないかな

■ 屋久島の問題提起とビジョンについて

・屋久島についての問題提起は語りつくされている。具体策がとれていなく、その原因や責任の所在が明確にされていないため、責任の所在を明らかにする必要がある。これにより様々な問題を解決する策が出てくるのではないかな。今はバラバラに議論している。

・環境文化村構想で提言されたことが実行されていない。縦割り行政の中で役所がかかわりすぎて、アクションできない事が問題であるなら、それを問題提起してもいいのではないかなと思う。

・「島をどうしていくのか」の議論を若い人たちにしてもらいたい。自分達はこのことについて責任をはたしていないので、責任をはたしてほしい。

・町が理念を自分のものにしてほしい。

・屋久島町観光基本計画にある来島者数の目標を達成すれば経済的には潤うのかもしれないが、これまでと同じ方向に進んでしまうのではないかなと思う。

■ 屋久島の役割

・屋久島は世界の中での役割として考えるべきである。協力金についても地元、観光業が負担すべきであり、いずれは倍になって返ってくる。

・屋久島は木材供給だけでなく、人々に癒しを与える役割もある。安請け合いする必要はない。

・屋久島は誰かの為、子供の為ではなく、人類にとって豊かな島としてあり続けてほしい。「森が人を創る」事が根底にあり、子供だけでなく全ての人に対して教育の島であると思う。屋久島が与える何かがあるのではないかな。その中で、島内の学校が統廃合して教育の場が縮小していく事は、屋久島にとってマイナスである。

・民宿を経営していると、毎年宿泊していく人がいる。その人達にこたえてくれる屋久島とは何なのか。その人達自身が探しているのかもしれない。

・ヤクスギの樹齢と同じく 2000 年から 3000 年のスパンで感じられる島である。また、永田の浜からは、共生と循環が目に見えて感じる事ができる。これも屋久島ならではのと思う

・国立公園、世界自然遺産というゾーニングを受け入れたことで、山に対して住民の関心がなくなったが、今がターニングポイントではないかと思う。

■ 岳参りについて

・岳参りには関心がある。「森が人を創る」となにか関係があるのではないか。5000年前の人たちは屋久島をどう思っていたのか？それは何なのか？当時からの独特な伝統が岳参りだったのかもしれない。永田が岳参りの発祥だったのではないか。

- ・伝統は、その時代に生きていた人たちの感じ方だったと思う。それが岳参りになったのかもしれない。
- ・永田と一湊は交流がなかったが、岳参りはどの集落もやっている。
- ・岳参りだけでなく、海も素晴らしい。この素晴らしい恵みを生かしているのか。
- ・昔に学ぶことは沢山ある。昔の人に知恵や生き方には、学ぶところが多い
- ・死んだあとは、先島丸に乗って海に帰るという考え方があり、岳参りと先祖の祖霊信仰とはつながっていない。

■ 登山道について

・「縄文杉登山を考える会」があった。縄文ルートを楠川歩道のような登山道にしてほしかった。石組みは織田信長前後で手法が違くと。石普請という本がある

■ 永田浜のウミガメ保護

- ・永田浜のウミガメについては、自然保護思想の原点として卵を見つけた最初の人々の驚きを感じない人はいないと思う。ウミガメは海の神様とよんでいた。昔の人は食べてもいたが、食べつくしてはいない。
- ・カメの個体数、産卵数もわかっている人が、カメの卵のおいしさもわかっていたのではないか。東京からのボランティアではなく永田区を中心として保護活動を継続してほしい。今は過渡期にきているのではないか

■ シカの個体数調整について

- ・「ヒト二万、サル二万、シカ二万」とはいつから言い出したのだろうか。棲み分けが出来ていた時代があったと思うが、現在はどこかの勢力が強くなった。
 - ・シカの個体数調整の具体的なところになると、立場によって責任の所在等の問題が出てくる。人間の影響があった結果このようになっている事に空しさを感じる
-